

神山町の伝説

史学班（徳島史学会） 湯浅安夫¹⁾

1. 神山町の伝説の背景

神山町に伝わっている多くの伝説は、町の文化遺産であり、町の自然環境や長い歴史を背景に生まれたものである。したがって神山町の伝説を調べるには、町の歴史や自然環境、さらには現状や問題点も把握しておくことが必要であると思われる。以下それら伝説の背景とおもわれるものの概略をまず述べてみたい。

神山町は四国山脈の東部に位置し、全面積の約83%が山地であり、その中央を鮎喰川^{あくい}が蛇行して流れ、それに鬼籠野川^{おろの}、神通谷川^{じんつうだに}、北谷川などの谷川が流れ込んでいる。鮎喰川の源流は上分奥屋敷^{かみぶん}であり、延々50kmを流れて吉野川に達している。緑なす山々からわき出した水は谷となり、滝となり、美しい溪谷美を作っており、自然に恵まれた所である。気候は温暖で雨量も適切であって、まさに山紫水明の地である。

歴史は古く、石器時代の石斧、石棒が出土している。弥生時代の遺物、県下の銅鐸^{どうたく}の出土数は全国有数であるが、銅剣は少ない。その少ない銅剣が、鮎喰川流域の国府町矢野源田^{げん}と神山町下分の左右山^{しもぶん}や東寺^{とうじ}から計11振り（神山町では5振り）見つかっている。石器時代から人が住み、弥生時代から独特の高度の文化が栄えていたようである。古墳は少なく、今後の研究にまつところであるが、板碑の数は県下でも多く、県下の全数の15%ほどの建立が見られる。また、12番札所である焼山寺^{しょうざんじ}などの古寺には古文書や経典などが残されており、相当な文化の程度をしのばせるものである。

神山町は、昭和30年（1955）、上分上山^{かみやま}・下分上山^{じんりょう}・神領^{じんりょう}・鬼籠野・阿野の五つの村が合併して、県下でも指おりの広い面積を持つ町として生まれた。したがって、東部の阿野地区は徳島市と境を接し、最奥の上分上山地区は剣山のふもと木屋平村^{こやだいら}と接していて、同じ神山町といっても住民の生活や意識には相当の違いがあるようである。神山町は最近、過疎化という大きい問題を抱えている。合併当時2万人ほどあった人口も今は半減し、特に奥地になるほど過疎化がすすみ、上分中学校は休校になり、上分小学校も休校になろうとしている。

また当地は地滑り地帯で、台風やそれにもなう豪雨などの自然災害に弱い。新しいところでは、昭和49年（1974）の豪雨によって上分地区は相当痛め付けられた。そのような災害は過疎化に拍車をかける。美しい自然を守り、自然災害から町を守ることは過疎化を

1) 徳島市住吉1丁目9番29号

防ぐもとなり、町の大きい課題である。

以上のような神山町の自然環境や歴史が、伝説を生む背景となったようである。最近、どの町村でも伝説などを語る年寄りも少なくなっているが、特に過疎化のすすむ神山町では、地域に伝わってきた話を知る人がいなくなって、今調べておかないと伝説が忘れられてしまう。そんな危機感もあってか、最近、町教育委員会が積極的に町民に働きかけて町の歴史を掘り起こし、伝説の研究もすすめられている。

2. 神山町の伝説の分類と特色

神山町の伝説は、「神領村史」「上分上山村小風土記」などの旧村史や、成人大学講座の「神山のむかしばなし」「神山の地名をさぐる」「神山の歴史探訪」などの刊行物、平成11年に神山町文化財保護審議会より出された「神山の史跡と伝説」などに多く収集されている。また長年にわたりこつこつと伝説等を集められ、「神山の伝記・伝説」という冊子に記録されている高橋支先生の御努力は、愛郷心のにじみでているものである。これらの書物にあるもの、および外に4～5人の古老に協力していただき集めたものを、以下のよう

表1 神山町の伝説分類一覧

弘法伝説	柳の水 長代の鏡石 弘法大師と滝津 高根と弘法大師 焼山寺と弘法大師 門屋の大泉となべ淵 竜王山と護摩檀 池の丸と弘法大師 経の坂 食わずの芋 谷屋坊と弘法大師供養の水 右衛門三郎と杖 杉庵 四足堂 御来光の滝 一本杉浄蓮庵 大師投げ地蔵 爪型地蔵 ゆるぎ石 石風呂 蛇淵
平家伝説	平家岳 弦巻峰 血洗いの泉 陣が丸 鎧塚 媛の岩屋 七人塚 隠れ岩と初白山 鎧の岩屋 高根在所 東宮城 腰掛石 王屋敷と王泉 七屋敷と鍛冶屋敷 首級塚と檜の久保 宮の久保と末利の久保 肩白 陣が丸と土俵の久保 鎧岳 ちご淵 鎌八幡 京女神社 馬の墓 コヤドさん 平家落人の板碑 平家の落人 西真田家の先祖
人物に関するもの	楠木正勝 田中覚之進の豪胆 兼松総右衛門の墓 藤川治左衛門の軍功 服部庄兵衛の勲功 釘貫の林助 蔭山逸之輔 大地の重左はん 傑僧寛雅 拝留の裁定 足早の庵坊 勝 明寺洞門と高橋正之進 辰の市のはじまり
動物に関するもの	無人の屋敷の牛が鳴く 平野の狐 大蛇に吞まれた話 神通 滝の大蛇 駒坂の大蛇 猫淵
木や石に関するもの	秋葉山の鏡石 黄金松 人面岩 御馬石 スマルの松 杉尾神社の大杉 お瓶石 大久保の乳イチョウ 鞍掛石 腹痛石 新田石 大人石 長善 寺の葬礼松 石足袋 青井夫会堂の楓 北谷の七森 オミキ松 踊り石 オンギャ石 呼び石 夫婦石 猪の頭の大桜 稲荷松 楠権現 風穴
水に関するもの	馬淵 喜来八幡社の淵 上臈が滝 ゴウラ淵 仏殿の滝 塩水の池 寄井の洪水 谷屋の三里の干河原 蛇松と蛇淵 源太郎淵 カゲ淵 池の丸神社の池 わん滝 がま淵 嫁の滝 刀の水 お亀石の淵 軽人淵 絵図尾の滝

<p>社寺・神仏に関するもの</p>	<p>上<small>かみ</small>一<small>いち</small>宮<small>みや</small>大粟神社の由緒<small>ゆきよ</small> 負田<small>まけた</small>と長袖神社 黒松八幡の不思議 六地藏 悲願寺の常夜燈 悲願寺と野間中山堂 観音さんと蚕 長倉の薬師 子供と遊ぶ地藏さん 叱咤する若僧 生木の地藏さん 首切地藏 かさぼとけ 神宮寺の釣鐘 新田八幡神社の流出 やきもち神 陣が丸神社とかんざし<small>かむら</small> 川平の子持地藏 雲早山と雨乞の神 東の森・西の森 西分のお不動さん</p>
<p>旧家に関するもの</p>	<p>渡辺の綱の子孫 清正公 三日月の粟飯原家 高根在所と高橋家 板挟<small>いたばさみ</small>の藤原家 青井夫の河野家 逆流する銘刀</p>
<p>地名に関するもの</p>	<p>本根川 府殿 殿宮 奥屋敷 野保路 坂丸 柿道 江島 入手 西久地 名ヶ平 一字夫 有懸 大中尾 中津 カイケのたお 経塚 金泉 門家 通地面 栗生野 鬼ヶ城 大人の久保 響 角場 原の馬場 お頭坂 札場 はしあげ 御蔵のはら下番 椿坂 手足谷と胴谷 舟のり 船頭町 寄井町と辻堂町 長法寺と池の尻 小野の赤竹 神田 船戸 古庫と長倉 大栗山 神領の村名 氷小屋 いらんさこ ふるこうし 古祠場 鬼籠野 籠が谷 はいっち山 弓折 笠置 行者野 齒の辻 大屋敷 坊主の屋敷 青蓮寺 廃寺跡 唯月別荘跡 獄門峠と遍路墓</p>
<p>妖怪・変化に関するもの</p>	<p>ガ行さん 首切れ馬 山父 南峯の山父 天狗の声 狸の石割 小豆洗い 狸の火葬式のまねをした狸 石本の金八とお染 門屋の白徳利 大木倒し 狸の提灯行列 六右衛門狸 いくさに出た狸 ケイシの狸 狸の夜づり 阿川の井の谷の狸 大土手の牛の子 池の丸の竜の主 池の丸の白鹿 赤熊天狗山の天狗 芝小屋の怪 松ノ尾権現森の怪物</p>
<p>その他</p>	<p>拝府のしめかざり 下分・上分の境界線 カク 大狸の話 顔が三つある墓 十八人塚 銀のかんざし オオクラさんの板碑 こいと<small>いかわ</small>の瓦 木地屋 カイケのたお 城山 東宮さんの三兄弟 お菊の窟 北谷の七不思議 坂丸の一本橋 金泉城 金泉の五輪塔</p>

過疎化のすすむ神山町は、伝説伝承の危機に直面しているが、その収集に尽くされている人々の努力は貴重なものである。その成果は前記の書物にまとめられていて、今までに調査に訪れたどの町村よりも多く収集されているのは驚く程である。かつて私が上分中学校に勤務していた時、生徒と共に校区を中心に神山の伝説を集め、それを基に「名西の伝説」という書物を編集したことがあった。今回もう一度集めてみて、やはり、地域の伝説はその地域の人がかつこつと集めるのになかなかないと、当たり前のことをつくづく感じたものである。そんな感想を交えて、神山町の伝説の特色の一つとして、伝説等の収集がすすんでいて、その数が大変多いということを挙げたい。前記一覧表の伝説の数は240という多数である。

県下の山間の町村には、どこでも平家の落人伝説があるが、神山町にも多くの平家伝説がある。一覧表のように、上分の東宮山等に多くて、その数は30にせまる程である。また12番札所焼山寺があることが関係しているのか、弘法大師にまつわる伝説が多い。焼山寺以外にも一本杉浄蓮庵や柳水庵、四国巡礼のもとといわれる右衛門三郎の墓のある杖杉庵の伝説など多くの弘法伝説がある。平家・弘法伝説が多いということも、神山町の伝説の

特色の一つとして挙げたい。

3. 神山町の伝説の例

1) 門屋の大泉となべ淵

昔、門屋あたりはひどい干ばつにおそわれ、人々は飲み水にも不自由するほどであった。ある老婆が遠くの淵よりなべに水をいれてもって帰る途中、みすばらしい格好の坊主が水を飲ませてくれという。その老婆は心優しい人だったので、「どうぞ、どうぞ」となべごとさしだした。うまそうに飲んだ坊主が、なぜそんな遠方から水をくんでくるのかわけを聞くので、老婆は干ばつで苦しんでいる状態を話すと、坊主は「わたしがきれいな水を出してあげよう」というと、もっていたついでこつこつと山肌をたたくと、清水がこんこんとわきでた。

それが今も残っている「大泉」であり、老婆が水をくんできた淵は、「なべ淵」と呼ばれるようになった。なおこのみすばらしい坊主は弘法大師であったと伝えられる。

(門家 三好米子さん談〔「名西の伝説」より〕)

2) 平家岳

源平合戦の時、屋島の戦いに敗れた平家の武士たちは、阿川の宇度木^{うとうぎ}へ逃げてきたが、追手の源氏方が迫ってきたので、大きな崖^{がけ}の下まで逃げ、そこにあったかずらをよじ登り、崖の上へ逃げて追手の来ないようにそのかずらを切ってしまった。追手はあきらめて引き上げた。平家の武士たちは難を逃れたが、いざ自分たちが下へ降りようとしても、かずらを切ってしまったので降りることができない。宇度木部落の人たちに大声で助けを求めた。その当時、宇度木は家数わずか三軒であった。自分たちを助けてくれたら、この村を千軒の町にしてやると叫んだが、だれも助けに来てくれなかった。あわれ平家の武士たちは、崖の上で飢え死にしてしまったという。

今も宇度木の上の山を「平家岳」と呼んでいて、山上の一段高い所に三つのほこらが祭ってある。ふもとには「平家賀大神」と書かれた額をかけた鳥居もあるが、その神は近くの神社^{ごうし}に合祀された。なお、そこには鎧・兜^{かぶと}の金具などが戦前まで残っていたそうである。(城河内 中山 馨さん〔76歳〕談〔「神山の歴史探訪」より〕)

3) 拝留の裁定

下分の拝府に「留さん」という奉公人がいた。あちこちの大家で奉公をして生計をたてていた。拝府の留さんであるので、「拝留」とも呼ばれていた。

神領の岸新左衛門の家へ奉公にいていた時の話である。下分と阿川との境^{しょうぶ}の庄部というところのたお(峠)で、行き倒れがあった。当時、行き倒れは部落で始末をしなくてはいけないことになっていたが、境であったので下分ですか、阿川ですかもめて、な

かなかきまらない。岸新左衛門様に裁定してもらおうということになって、お願いに行つたところ、その時、ちょうど新左衛門は忙しくて手が離せないので、拝留に「かわりに行ってこい」と命じた。拝留は岸さんのかわりなので腰に刀をさして出掛けた。庄部（下分）を通るとき、庄部の人が「お役目御苦労さんです。よろしくお願ひします」といって、袖の下をそっと渡した。さて、拝留の裁定であるが、境の地に庄部と阿川の両方から行き倒れ人を支えて立てる。「わしがよっしゃといたら手を離すのだぞ。倒れた方が始末せい、よいか」といって、両方の人に支えられている行き倒れ人を真つすぐに立っているかよく調べる。庄部の人に袖の下をもらっているの、阿川の方に少し傾いている時に、「よっしゃ」といって、行き倒れ人は阿川の方に倒れた。阿川の方で始末するようになったそうである。

（拝府 元木守之さん〔73歳〕談）

4) 拝府のしめかざり

下分の拝府・榎谷・暮石では正月のしめかざりをしないという伝承を受け継いで、今もしめかざりはしない。そのことについては、次のような二つの伝説がある。

昔、正月15日の朝、ある若者が拝府の戸へ出て来て、「拝府、暮石、榎谷のものみんなよってこい。正月の神さんが幸家屋の峠（上分と下分の境）で落ちて、伊勢へ帰らないかんの、道に迷って困っている」というので、みんなが集まると、神様が「阿波のすべののところに行っていたわれわれの仲間が、忌部神社と大麻神社に集まって、今日、伊勢へ帰ることになっている。ところが道に迷って、帰る時間に遅れては弱るので、誰か送ってくれるとありがたい」という。それではお送りしようと、足の達者な2～3人で大野の大桜峠まで送って行くことにした。その道すがら神様は各地で見聞したいろいろなことを話してくれた。別れ際に「何か望みはないか？ 神様事だとなえることがでけるが…」と神様はいう。「せっきにしめ縄をたくさんするのが忙しくてかなわん」といって、「しめ縄は大蛇、だいだいは大蛇の目、串柿は大蛇のうろこじゃ。すさのおの命のおろち退治の名残りだから、そんなものなくてよらしい」といってくれた。それで、しめ縄をしなくてよいことになったが、そのかわりそれまでしめの内の15日は、畑へ人糞をまかないことになっていたが、1か月は人糞をまかないことを約束して帰った。拝府ではそれからずっとこの約束は守られてきた。もう一つの言い伝えは、白髪 of 老人の姿をした神様が老婆にしめかざりをしなくてもよいといったということである。

（元木守之さん談）

参考文献

- 神領村誌編集委員会編「神領村誌」(1960) 神領村誌編集委員会
粟飯原太郎兵衛「上分上山村小風土記」(1913) (上分上山村誌編集委員会複製〔1969〕による)
神山町成人大学講座「神山のむかしばなし」(1975) 神山町教育委員会
 〃 「神山の地名をさぐる」(1989) 〃
 〃 「神山の歴史探訪」(1995) 〃
 〃 「神山の歴史探訪」第二集(1997) 〃
神山町文化財保護審議委員会編「神山の史跡と伝説」(1999) 神山町教育委員会生涯学習課
高橋 支編「神山の伝記・伝説収集ノート」
湯浅安夫編「名西の伝説」(1971) 小山助学館
横山春陽「阿波伝説集」(1980) 歴史図書社
藤澤衛彦編著「日本伝説叢書阿波の巻」(1917) 日本伝説叢書刊行会
徳島県老人クラブ連合会「阿波の語りべ」(1988) 徳島県老人クラブ連合会
武田明・守川慎一郎「阿波の伝説」(1977) 角川書店
名西郡役所編「名西郡志」(1916) (復刻版 臨川書店〔1973〕による)
石毛賢之助「阿波名勝案内」(1916) (復刻版 歴史図書社〔1979〕による)
徳島新聞社編「石が語る阿波」(1956) 徳島新聞出版部
横山春陽「阿波名木物語」(1960) 〃